

UNIVERSITY CONSORTIUM KYOTO

ポストコロナ時代に向けて変化する教育現場

会報

2021.
Feb.
No.

52



Voices from Students

特集 1

教育現場にオンラインを取り入れる
— 京都大学 塩瀬隆之准教授インタビュー —

特集 2

学部で取り組んだコロナ禍の新入生ケア
— 京都産業大学理学部 「オンラインランチタイムミーティング」 —

特集 3

新入生をケアする仕組づくり
— 京都橘大学 「たちばな Connect Project」 —



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

大学コンソーシアム京都の学生支援

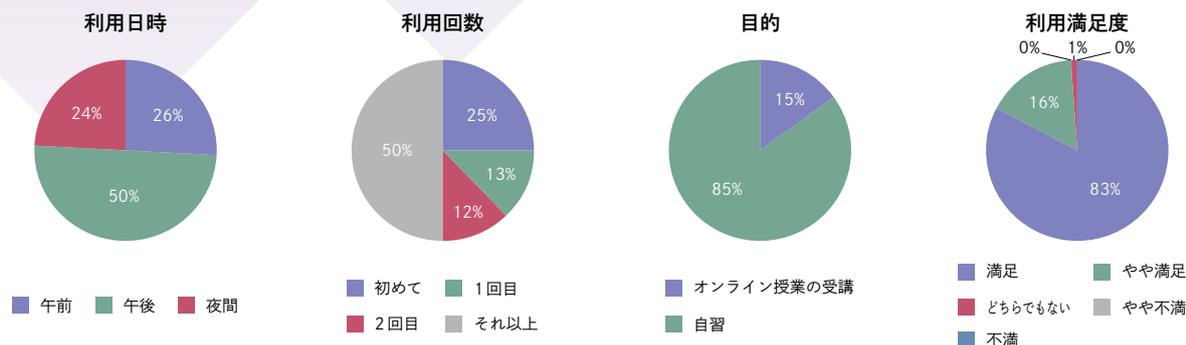
2020年春学期は、多くの大学において遠隔授業の実施や入構禁止措置がとられ、学生が安心して学ぶことができる学習環境の確保が大きな課題となりました。

こうした状況下、学生の学びを後押しするため、2020年6月9日から8月31日までの期間限定で、キャンパスプラザ京都内に、Wi-Fiや貸出用ノートパソコン、プリンタ等が無料で利用できる学習スペースを開設しました(大学コンソーシアム京都と京都市の協働事業)。開設期間中、600名以上の学生が利用登録を行い、1日あたり約100席、延べ約8,500席の利用がありました。

また、アルバイト先の休業や雇止め等で経済状況が悪化した学生を支援するため、学習スペースの運営スタッフとして学生アルバイトの募集も行い、採用された45名の学生は、学習スペースの設営や受付、利用者の検温などの業務に従事しました。

利用者アンケートでは、利用満足度について99%の方に満足、やや満足の回答をいただき、「カフェも使いにくく、大学も利用できず、家ではなかなか集中できなかったが、ここは静かで集中して学習に取り組めた」、「感染対策もしっかりと取られており、Wi-Fiやパソコン、プリンタを無料で利用でき、安心して便利に利用できた」等の声をいただきました。

なお、9月以降も継続して開設を希望する声を多数いただいたことから、一部事業内容の見直しを行ったうえで、引き続き2021年3月末まで学習スペースを開設しています。



加盟校向けオンライン研修会

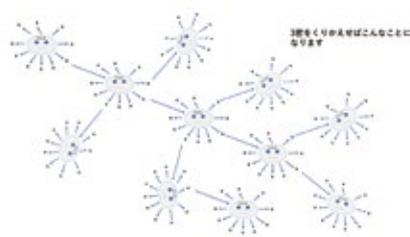
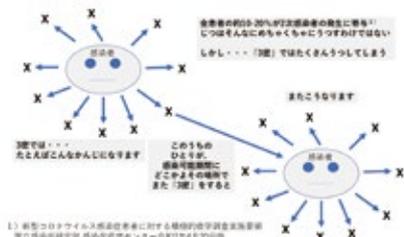
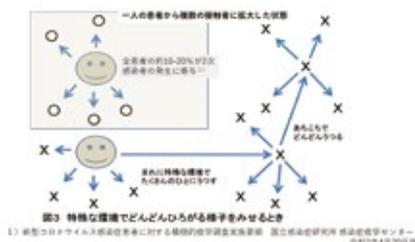
財団では、コロナ禍で様々な対応が必要となっている加盟校の一助となることを目的にオンライン研修会を開催しました。

【新型コロナウイルス感染症対策研修会】

危機管理対策の担当者を対象として2020年8月と12月に2回開催し、各回とも京都市保健福祉局職員に講師を務めていただきました。

8月の第1回研修会では、「クラスター」が発生するプロセスや対策、感染者が出た場合に迅速かつ適切に対応するため、相談窓口の設置や学生の連絡体制の整備などの大切さについて学びました。

12月の第2回研修会では、感染対策の徹底が引き続き必要であり、ぜひ静かな年末年始を送ってもらいたいこと、また、静かな年末年始を送ることは「我慢」ではなく「社会貢献」だということを学生に向けて発信してほしいといった説明があり、感染の現況や留意点などについて理解を深めました。



【コロナ禍にある京都企業の採用活動に向けた動向等に関する研修会】

主としてキャリアセンター職員を対象として2020年11月に開催しました。

連合京都会長の廣岡和晃氏から「コロナ禍における現下の雇用情勢と、就職活動支援について～キャリアセンター職員の皆様にお伝えしたいこと～」を講演題目として、コロナ禍における今後の採用見通しや就活に向けての心構え等について説明があり、学生のキャリア支援に参考となる現場の声を伺うことができました。

[特集1]

教育現場にオンラインを取り入れる

— 京都大学 塩瀬隆之准教授インタビュー —



待ったなしのオンラインの対応が迫られた2020年度の春学期。

コロナ禍以前からオンラインを取り入れ、授業をデザインされてきた、京都大学総合博物館の塩瀬隆之准教授に、オンラインに対する考えをお聞きしました。

コミュニケーションツールのひとつとして 取り入れ始めたオンライン

講義にオンラインを取り入れられ始めたのはいつ頃からでしょうか。

7年程前からLINEやfacebookを取り入れ、その後、skypeやZoom、slidoも導入しました。ディスカッションの方法自体を学生に学んでもらうため、例えば色々な場所からLINEでディスカッションすると、普段は発言が苦手な学生が意見を言えたり、発話権のテクニックに気づけたり、逆に対面で空気を読みながら話すことの大切さが分かったりします。オンラインはあくまで道具。使いこなせるようになることが大切です。

私が担当するコミュニケーションデザインの授業では、初回は90分間自己紹介だけを行います。自己紹介は制限時間や順番に左右されるので、工夫を重ねて学びます。2回目の授業では椅子の座り方だけを試し、並び方をデザインすることで話す内容が変わることを体感したりします。そうしたコミュニケーションのひとつがオンラインでした。その授業ではレポートも、人と被らない出し方にするよう指定してみました。すると色々な方法を考えます。すべて漫画にするなんて発想も。そうして型にはめ込まずに許容していると、できることがどんどん増えていきました。

「こんな人と一緒に授業を受けているんだ」と感じる「場の作り方」

オンラインの欠点のひとつは一体感がないことかと思えます。対面では周囲の様子が自然と目に入りますが、オンラインでは画面に全員映っていたとしても周りを感ずることができず、先生やパワポに集中して孤立してしまいます。そこでどのように横の連帯を作るかがひとつの鍵。授業では冒頭にアイスブレイクを設け、ブレイクアウトセッションで1分でも3分でも自己紹介し合うようにしています。「こんな人と受けているんだ」と感じることで、孤立しなくなるんです。

アイスブレイクには「こんな人と授業を一緒に受けているんだ」という意味もあるんですね。

アイスブレイクで大切なのは、「誰と受けているか」を感じることと、「その日最初に発声する」こと。80分間声を出さなかった授業の最後に「質問がある人」と聞かれても声を出しづらいですね。それは会議でも同じで、最初に声を出してもいいと思えると、途中で意見を求められた際の発言量が増えます。そういう意味ではオンラインの工夫というよりも、そもそも「場の作り方」ですね。

そうした「場の作り方」を自然とオンラインに持ち込んだということですね。

そうですね。授業の主役を先生と考えると、先生は自分がどのように工夫しようかと考えますが、主役は学生だと考えると、彼らを主役にするためにどのように授業を作るかという考えになります。京都大学は「対話を根幹とした自学自習」をアカデミックポリシーにしており、一人でできない自習をします。教科書にすべての答えがないものを学ぶとき、学びながら仮説を誰かにぶつけ、違う仮説を誰かからもらい、修正していきます。だから自習するためには対話が必要。大学の研究は本来、誰かと話さなければ前に進まず、だから学会が存在し、研究会が存在します。教科書やテキストは間違っているかもしれないし、変わるかもしれない。それが前提になっているので対話を根幹とする自習が必要なんです。オンラインで学習効果を低く感じた場合にはそれはオンラインのせいではなく、授業設計の問題かもしれません。

授業ではプライベートチャットも推奨しています。どんどん活用して互いに連絡し、学生同士のつながりを大切にしてもらいたいです。一緒に受けている仲間感覚につながることはもちろんですが、聞き逃した学生同士が確認する手段ともなり、学習の向上にもつながります。

よく問題として指摘されるビデオのオフや接続居留守は、学生の学習態度が変わって起こったものではないというお考えも取材に先立ち聞かせていただきました。対面時から存在した課題がオンラインに持ち込まれたということですね。

授業に対する熱意が急に下がったわけではなく、対面授業でもボタンがあればカメラをオフにする学生はいたかと思います。それが可視化されたと考えると、顔が映っていることと授業をしっかり受けていることはまた違います。

授業では一体感をつくるために、最初は全員でミュートを外して「おはようございます」と挨拶し、最後にも同様に挨拶するようにしています。一

度、全員でカメラをオフにして音声のみで話すことを試しました。そうすると、音声だけの方が内容に集中できて実はよかったです。名前を全員「？」にしたこともあります。誰が誰かわからない者同士で話すとそれはそれで内容に集中でき、カメラをオンにしたときに「さっき話した人はこの人かな？」と興味もわきます。カメラオフの機能はあくまで選択肢でしかないの、生徒自身が使い分けられるといいかと思います。



オンラインを楽しむ

急なオンライン対応で苦勞をされた先生方の話も聞きます。教員の立場から実践すると役に立つと思われることなどはありますか。

自身で一度、生徒としてオンラインを経験すること、また、オンライン技術を使った楽しい遊びを経験することかと思います。オンラインの面白さを知らないままこれまで通りの授業をしようとするとうまういかなくなります。オンラインを楽しむ話でいうと、この夏、静岡の中高一貫の学校と一緒に Zoom を使った肝試しを試みました。中学生・高校生と京大の学生が、情報収集しながら毎週 Zoom と Slack で打合せを進め、学校に宿題を忘れた生徒が夜に取りに戻るという設定で、Zoom のあらゆる機能を試行錯誤しながら皆で作成し、メディアでも取り上げていただきました。オンラインは面白い、楽しめると思ってもらえたことがよかったです。

面白いと思える試みをご自身で考えていかれているのですね。

例えば最初の授業で、「面白いバーチャル背景にした人が勝ち」という課題を出したこともあります。すると皆それなりに考えてきます。また、「分かった」や「分からない」などを背景の色で表明することも試みました。

対面の大切さ

対面授業の大切さについてはどのようにお考えでしょうか。

このようにオンラインの可能性を試しているとオンライン推奨と思われるかもしれませんが、対面の大切さは人一倍わかっているつもりです。所属する京大博物館で開催中の「iPS細胞研究所展」では、iPS細胞を覗ける顕微鏡を置いたり、皆が書けるホワイトボードを置いたり様々な工夫を施しましたが、新型コロナウイルスの影響ですべて触ることができなくなりました。私が博物館で実施する授業では、これらに近づいて触れながら話をしてきたため、それができないことで対面の大切さを切実に感じます。だからこそ、対面に戻れるまでの間にも学生が学び続けるチャンスを作り続けなければいけません。

これからの大学

ポストコロナ社会でのオンラインについてはどうお考えですか。

完全に元に戻ってしまうのはもったいないので、良い部分は取り入れたらと思いますが、シラバスでも授業構成を受けやすいように工夫するといいかもありません。生徒の履修環境に配慮して、午前中はオンラインで午後は対面にするなど。

また、オンラインでスタートする1回生のケアは大きな課題かと思えます。今年は多くの大学が授業のオンライン化に注力したように感じますが、2回生以上の学生にとってのオンラインの課題と1回生に

とっての課題とでは、同じオンラインでも大きく異なっただかと思えます。大学とは何か？という戸惑いを消化するはじめての半年をひたすらオンラインで過ごさなければいけなかった1回生のケアについては、大学コンソーシアム京都でも大学共通の課題として共有していただければと思います。もちろん大学ごとに状況は異なりますが、学生の立場で考えると、高校生から大学生になるという状況は皆同じです。

学生をケアする仕組み

新入生のケアについて改めて考えると、これまでは先輩などがうまく対処してくれており、大学のサービスとしては不十分だったかもしれません。今年4月に授業が休講になった際、課外活動として任意で参加してくれた学生とオンラインで話しましたが、「何に困っている？」と聞くと、例年ならサークルの勧誘があり、先輩と話しながら授業や単位について聞くことができるが、その場面がないということ。そこで次の週には先輩と1回生がディスカッションできる場を作り、「『大学生らしさ』はどこで感じるのか」というテーマで話しました。「食堂」「大教室」「今は行けないね」「では行かずにどのように大学生らしさを感じるのか」と話を進めると、大学生というのはキャンパスに来ることで大学生になり、これまではその過程に任せて大学も教員もそれ以外を十分に考えられていなかったのだということが分かりました。そこをオンラインでどう補うかを考えると、授業の健全化よりも先に先輩後輩といった横のつながりをいかに作るかが大切かと思ったので、5月に開催された大学コンソーシアム京都の高校教員向けオンラインイベントでは、「新入生のモチベーション」をテーマに話をしました。授業そのものに惹きつける工夫はたしかに大切ですが、それ以上に、他の学生と一緒に受講しているのだと安心して出席できる環境作りが大切かと思えます。

来年は対面授業からスタートできたとしても、先輩が後輩をみる仕組みなどは、学生に任せっきりでなく少し意識する必要があるかもしれません。教職員の負担は増えるかもしれませんが、学生にとっては嬉しいことですね。

学部で取り組んだコロナ禍の新入生ケア

— 京都産業大学理学部 「オンラインランチタイムミーティング」 —

授業のオンライン化により大学では、「新生へのケア」がこれまで以上に重視されるようになりました。そんな中、京都産業大学理学部では、これまでの経験を活かした取組をオンラインで実践されました。学部としてどのような取組をされたのか、理学部長の河北秀世教授にお話を伺いました。



新生向けに「オンラインランチミーティング」を開催された経過をお聞かせください。

理学部ではこれまでから入学前の3月末と入学直後に新生を集め、教員や2年生以上の先輩と話ができる機会を設けてきました。大学生活に不安を感じている学生を把握して早期にケアすることが目的ですが、縦のつながりをつくってあげたいという想いもあります。今年はそれを実施できないまま5月にオンライン授業が始まってしまいましたので、これまで以上にケアすべき学生がいるのではないかと思います。早急に学生と教員が顔を合わせる時間を作ろうと、「オンラインランチミーティング」を始めました。

これまでから存在した、新生をケアする仕組みですね。

大学では、高校までの受け身が多い授業から、主体的に疑問をもって学ぶ方法に変わります。入学して1箇



月くらい経つと、「大学の授業についていけない」や、「友達を作るのが難しい」と感じる学生が一定数いますので、学生同士が話をして友達を作るきっかけになればと、パズルや数学の問題を一緒に解くといったアイスブレイクの時間を3月末に設けてきました。

また、学修支援としての「学修アドバイザー」という制度もあります。1人の教員が10人以下の学生を担当し、春や秋に実施するガイダンスで学修指導を行うほか、学生が将来やりたいことを見据えた履修指導を行う、いわば学生にとって「担任」のような存在です。今回の「オンラインランチタイムミーティング」ではその学修アドバイザーの制度を活用し、教員と学生が顔を合わせながら困っていることがないかを確認しました。

学生からはどのような話がありましたか？

例えば「課題が多くて管理できない」という話が出て、問題だなと思いました。定期試験がなくなったため、多くの教員が毎回の授業レポートで成績評価をしようと考え、学生は毎日4つくらいの締切に追われていたのです。量の問題だけではありません。例えば月曜3限の授業のレポートが日曜締切でそれが複数あるというスケジュールになると、私たちでも混乱しますよね。特にまだ教員と親しくなれていない1年生は声をあげづらかったでしょうね。春学期は教員も必死だったとはいえ想像力が足りませんでした。そこで学生の声を教員間で共有し、理学部の専門科目ではレポートを減らす、といった対応をとりました。今後も学生と

話をする機会は作っていきたいですね。アプリを使用するアイデアなど、教員からいろいろ出てきているんですよ。

学生一人ひとりの声を大切に柔軟に対応されているのですね。

理学部はST比（教員一人当たりの学生数）が低く、教員と学生の距離が近いところが魅力のひとつです。今回は教員と事務室の職員が一緒になって動けたことが細やかなケアにつながったと思っています。

ただ、そもそも勉強するモチベーションが上がらない学生や、質問メールを送ることに心理的バリアがある学生もいるはず。そうした学生をどう見つけ出していくのか、どうやってそこにアプローチしていくのか、これまでからあった課題がオンラインでより顕在化した気がします。

試行錯誤しながらの春学期だったと思いますが、先生自身がオンライン授業で工夫されたことはありますか。

学生によってインターネット環境はバラバラだと思うので、私は講義系の授業は学内システム「moodle（ムードル）」からオンデマンドで見られるようにしています。映像を作るために通常の授業を録画して自分で観たのですが、板書の時間や「えーっと」という時間を短くしないと「ゆっくりだな」「遅いな」と感じるんです。そこでYouTuberの動画を参考にして1.2倍速に編集したところ、2回生以上の学生から「オンデマンドの授業は効率がいい」と言われました。わからないところをもう一度見たりレポートの時間にあてるなど、自分のペースで勉強ができたそうです。一方で演習授業のようにリアルタイムで質疑応答することが望ましい授業はZoomやTeamsなどを利用して時間割にあわせて実施しました。演習授業ではティーチング・アシスタントと呼ばれる大学院生がフォローに入ってくれているのですが、オンライン授業にも参加し、学生からチャットで届いた質問に対応してくれました。チャットだけではなく、ブレイクアウトルームを使ってみるなどいろいろな方法を試しながら進めました。

今回はどの大学、どの先生にとっても初めてのことで正解がわからない状況だったかと思っています。学部・分野や

大学、システムの違いはあったとしても、「授業はどうやっていますか？」や「秋学期どうすることにしましたか？」、「今困っていることはなんですか？」「うちはこうしています」といった意見交換ができる場所が大学コンソーシアム京都にあるといいなと思いました。

これからの社会は間違いなくハイブリットの形になり、従来の形には戻らないでしょう。学生の「やる気」や勉強の仕方に、対面・オンラインそれぞれの良さを活かすことが重要だと考えています。

大学に限らず社会でも同じことが言えますね。対面とオンライン、それぞれの良さを活かすために必要なことはなんでしょう。

演習や実験の授業で自由に質問できたりモノを触ったりできるのは対面ならではの良さで、一方で、学生が見たい時間に受講できるところはオンデマンドの良さではないでしょうか。双方の良さを来年度のカリキュラムにどのように活かしていくかをこれから私たちは議論していかなければいけないかと思っています。例えば時間割では、感染リスクが高いラッシュ時に通学する学生を減らすために1時間目はオンデマンドの授業を設定するとか。また、オンラインの授業後に学生が質問できるような配慮も必要です。以前はオフィスアワーの時間に先生の研究室へ行かなければなりませんが、今はメールでアポをとればオンラインで相談することができます。ZoomやTeamsが我々にとって当たり前のユビキタな存在になったので、こうしたツールを活用し、これまでよりも面白く柔軟に、マイナスと思えることもうまくプラスに変えていけたらと思います。



新入生をケアする仕組づくり

— 京都橘大学 「たちばな Connect Project」 —

京都橘大学では、5月上旬には新入生支援プロジェクトを始動し、6月には新入生応援サイト「たちばな Connect Project」が開設されました。そこには従来から大切にされてきた「支えあい」の文化がありました。

コロナ禍で大切にしたい「つながり」について、教務部の柴田英貴課長と藤井菜緒課長補佐、ピアサポーターとして参画した国際英語学部3回生の相賀美聖さんにお話を伺いました。



「たちばな Connect Project」はどのようにして始動したのでしょうか。

柴田： 4月22日に前期授業を全てオンラインで実施することが決まった時、私たち職員は、「学びを止めない」、「退学者を出さない」の2つを大きなミッションだと考えました。学生の実態を把握するためにアンケートを行うと、「入学した実感がない」、「アルバイトが出来ず経済的に苦しい」といった意見が寄せられました。「新入生歓迎イベントができない」という声にはとりわけ注目し、プロジェクトのサイト内に新歓も入れました。

京都橘大学は、「支えあうこと」を大学の文化として大切にしています。特に新入生支援では、“オリター”と呼ばれる上回生が新入生の履修や大学生活をボランティアでフォローし、その姿に憧れた新入生が次の年にはオリターになる…という学生たちが育んできた文化があります。新入生支援や新歓イベントができないままではその文化が今年で途絶えてしまうかもしれない、これは本学の良さを1つ失ってしまう危機だと感じました。なんとかこの文化を継続するためにできることはないか学内で議論を重ねた結果、オンラインで上回生が新入生をサポートする「たちばな Connect Project」の取り組みを始めることとなりました。上回生を「ピアサポーター」としてアルバイトで雇用することで、上回生に対しての経済支援も兼ねていました。5月上旬にプロジェクトチームを立ち上げ、ピアサポーターの募集を開始。6月1日には新入生を支援するサイトとして「たちばな Connect Project」を開設しました。

素晴らしい機動力ですね。プロジェクトチームはどのように構成されたのでしょうか。

藤井： 各学部の担当課や学生支援課、キャリアセンター、人事秘書課など、部署を横断して職員が集まりました。フット

ワーク軽く動けたのはキャンパスが1つであることも大きいと思います。

柴田： まずは新入生支援である「ピアサポート活動」を文化として大切にしたいという想いで進め、新歓やサークル活動を盛り込むことは、走りながら整理した感じです。

実際にピアサポーターとして活動された相賀さんはどうして応募しようと思ったのですか。

相賀： 不安を抱える1回生の「役に立ちたい」と思って応募しました。私自身も1、2回生の時は、オリターの先輩から履修のことや留学のこと、大学生活について教えてもらったことをよく覚えていましたし、オリターの先輩を通じて先輩との輪も広がりました。だから私もそんな存在になれたらいいなと思っていました。

私たち国際英語学部の3回生は3月中旬に留学から帰ってきたばかりだったので、感染拡大防止に配慮して外へ出ることができず、アルバイトを見つけることもできない不安な日々を過ごしていた状況でした。当然のことながら帰国後は英語を使う機会も減っていました。もともと、LA(ラーニングアシスタント)としてTOEIC勉強会などで後輩へのサポートの経験もあったので、活かせればと思ったことも応募した理由の1つです。

具体的にどのような活動をされたのでしょうか。

相賀： メインの活動は新入生からの質問に答えることです。私たちピアサポーターが中心になって少人数でグループ通話をして、1回生同士でも話ができるような雰囲気づくりを心掛けました。初めのころは、「高校の授業とは全然違う」、「履修で何をどれだけとったらいのかわからない」、「課題の提出の仕方がわからない」など授業に関する質問が多く、



国際英語学部3回生 相賀美聖さん

かなり戸惑っている様子でした。また、国際英語学部という学部の特徴から留学先に関する質問も多かったですし、下宿している学生からは、「授業と家事の両立が難しい」という話も聞きました。一人暮らしで友達もできず、ホームシックになっている学生の学生もいたので、どのようにケアすべきかとも考えました。

一人ひとりの悩みに寄り添うことはとても大変ですね。答え方など対応に困ることはなかったのでしょうか。

相賀：ピアサポーターと1回生のやりとりで間違った情報を伝えてはいけないので、気になったことや共有しておきたいことは、大学へ提出する業務レポートの「職員に伝えたいこと」欄に書き込みました。また、新入生の様子がおかしいなと思ったときは、ピアサポーター担当の先生に報告しました。職員や先生からすぐに返信が届くので、安心して活動ができました。さらに、私たち国際英語学部では、ピアサポーター同士が協力しあえるように、2回生から4回生でメンバー構成されるグループがつくられていたので、例えば2回生が経験していない留学については3回生の私や4回生の先輩が代わりに答えるといったこともできました。

藤井：このプロジェクトを通じて、学生たちに主体性を持ってほしいとも考えていたので、各グループの4回生にリーダー役をお願いしました。彼らは業務レポートの提出が遅れている学生への声掛けや2、3回生のピアサポーターへのケアなど、しっかりグループをまとめてくれました。

柴田：ピアサポーター自身へのケアで言うと、LAの研修を以前から担当している教育開発支援センターの教員とともに動画を作成し、活動前にはオンラインで研修を受けてもらいました。普段のFace to Faceとは違う状況でのサポートとなるので、伝え方についても「こうしなさい」ということよりも「これだけはやってはいけない」ということを中心に伝える、といったような研修としました。

相賀：研修を受けたことで、初めの声掛けや話し方の詳しい例を知ることができましたし、個人情報などに配慮しなければいけないこともよくわかりました。また、先生たちは学生一人ひとりをよく見てくれていること、学生の変化などについて情報を共有されていることなども改めて実感しました。

先生自身が日ごろからケアの意識を持たれているのですね。本当に素晴らしい文化だと思います。新入生と話す話題などは自分たちで決めていたのですか。

相賀：はじめのころは職員の方のお話を参考に進めていましたが、慣れてきてからは自分たちでスケジュールを立てて話す内容も考えました。例えば後期の授業がオンラインと対面のハイブリットになるということは早い時期から決まっていたので、7月の終わりには、後期からのキャンパスライフになじめるよう、施設や国際英語学部の先生の専門分野などについて話しました。同じグループだった新入生と対面ではまだ会えていませんが、「校舎の名前はわかりますか？」や「授業がわからないんです」など、今でも連絡を取りあっています。

対面ではまだ会えていなかったとしても、同じ時間を過ごされことでこれからも関係が続いていくのですね。制度としては8月末で終了されましたが、これからも文化を継続させていくために、今回の取組を今後どのように活かしていけるのでしょうか。

柴田：今回は「つながりを作ることの大切さ」を改めて感じた貴重な機会であったかと思います。参加してくれた学生にも帰属意識が生まれたようです。LAのように以前から有償の制度はありますが、内定をもらった4回生が3回生の悩みをきくという就活オリターや、新入生支援のオリターなど、学内の様々な取組に活かしていきたいですね。学生が今後どのように関わっていくかでこの取組の真価が問われると思います。



授業のオンライン化に学生達はどのような感想を抱いたのでしょうか。加盟校の学生の「声」をご紹介します。

オンラインのグループワークはランダムで振り分けられたため、普段意見を交わさない学生と話すことができ刺激になった。

社会科学系学部 4 回生

パソコンのやり方も危ういままだったので不安でしかなかった。

社会系学部 1 回生

Zoom 授業中に寝てしまって起きたら先生と 2 人きりだった。

社会科学系学部 2 回生

オンラインライブを鑑賞したが、やはりオフラインの空気感が良いと感じた。一方でどこでも見られる手軽さ、オンラインならではの表現方法（カメラワークなど）も如実に感じた。

工学系学部 2 回生

秋学期もオンラインが主な授業形態となっていたが、学生をグループ分けして週ごとに対面授業を進めるという形になってやっと"大学生になった"と実感した。

人文科学系学部 1 回生

目の疲れによる集中力の低下が対面より著しかった。

農学系学部 4 回生

友達作りはやはり対面の方が良いと思った。

保健系学部 1 回生

録画を残してくれる先生が多く、対面よりもしっかり勉強に取り組むことができた。座学はオンラインでコロナがおさまってから行って欲しいと強く思うが、実験などはやはり対面が良いと思う。

理学系学部 2 回生

オンラインでも討論できたことが良かった。有志の参加だったので、逆に意欲のある方と話せたのが印象的だった。

保健系学部 1 回生

新入生のためのオンライン交流会で友達ができた。

社会科学系学部 1 回生

YouTube 配信の先生の授業は面白く、毎週楽しみだった。

農学系学部 2 回生

1人で授業を受けなければいけないのでやる気が出ずに怠けてしまう。対面では一緒に受けている学生がいるため競争心が生まれ、勉強に集中できる。

人文科学系学部 4 回生

Google document を用いて離れた場所にいる学生と共同で文章を書いていく授業は、授業外でも学生同士話し合いながら活動できて非常に楽しかった。

工学系学部 1 回生

看護学実習が全てオンラインになってしまい、患者さんと直接会うことがないまま看護師になってしまうことになった。

保健系学部 3 回生

遠隔操作で実験をできたのは面白かった。

工学系学部 3 回生

友人に会えず孤独を感じていたが、オンラインで交流の場を開いてくださり、スムーズに大学生活をスタートすることができた。

人文科学系学部 1 回生

Zoom だとバーチャル背景を設定することができ、大喜利のようなこともできて楽しい。

人文科学系学部 2 回生

学んだ気がしない半年間。友達もできず、実習系もひとり家で取り組む形だったのが辛かった。

家政系学部 1 回生

パソコンや、Wi-Fi 環境がない学生への貸出支援は助かった。

社会科学系学部 4 回生

語学の授業で、発音を生で聴くか否かで、やはり対面の良さを感じた。

社会科学系学部 3 回生

Zoom 演劇への挑戦は面白かった。

芸術系学部 2 回生

先生が授業用の資料とは別に、ラジオ形式で親しみやすい内容の音声資料をアップロードしていただき、学生からの「お便り」を通じて他の学生の様子を知ることが出来たのが面白い取組だと感じた。

人文科学系学部 4 回生

新入生で情報が一切分からないままオンライン授業が始まった為、不安が多かった。

人文科学系学部 1 回生

オンライン企画として、本格的な茶道について関東の講師の方から話を聴けることが決まったが、それはオンラインだからこそ企画だと思った。

社会科学系学部 2 回生

私の学部の 3 回生はゼミ授業が既に対面授業に切り替わっているのですが、コロナの影響で下宿先を解約した地方の学生たちが、遠隔でも授業に参加できるようビデオカメラとスクリーンを使って全員が参加できる授業を展開しています。それがとても革新的だと思いました。

人文科学系学部 3 回生

グループワークでみんなが画面オフにしていたため、顔の分からない友達が出来た。

社会科学系学部 1 回生

Report

大学コンソーシアム京都における2020年度事業実施報告

教育開発事業部

教育開発事業部では、FD 関連事業・SD 関連事業・高大連携事業の3事業を行っています。各事業で例年開催しているフォーラムや研修会、セミナーなどは、2020年度は対面形式での開催がほとんどできず、急遽、Zoom によるオンライン形式で開催することになりました。各事業で開催したイベントおよびそれぞれのイベントで工夫した点などについて、事業ごとにご紹介します。

FD 関連事業

2021年2月開催予定の「FD フォーラム」は、シンポジウム、分科会、ポスターセッションや情報交換会すべてをオンラインで開催します。

「FD 合同研修プログラム」は、今年度はほぼすべてオンラインでの開催としました。対面開催のように、イベント開始前の会場の盛り上がりや、終了後の偶然の出会いによる人的ネットワークの広がりという点では課題が残るものの、物理的な場所の制約がなくなり、全国から多くの参加者を得ることができました。例年、対面で実施していたグループワークも、Zoom のブレイクアウトセッションで行い、オンラインツールの「Google スプレッドシート」「Miro」等を用い、オンラインならではのグループワークとなるよう工夫しました。

「IR フォーラム」では、京都府外からの参加者が大幅に増え、全体の参加者数は昨年より倍増しました。終了後に登壇者と参加者間で交流できるよう、登壇者ごとのミーティングルームを設けたことで、高い満足度につながりました。



イベント名称	開催月	年間開催回数	開催形式
FD フォーラム	2月	1回(4日間)	オンライン
FD 合同研修プログラム(大学執行部塾)	8月	1回	対面、オンライン併用
FD 合同研修プログラム(テーマ別研修)	9月・10月・11月・12月・1月	6回	オンライン
FD 合同研修プログラム(京都FD交流会)	8月・9月・12月	3回	オンライン
IR フォーラム	8月	1回	オンライン

SD 関連事業



「SD フォーラム」は、オンライン開催としたことにより、加盟校はもちろん、非加盟校からの申込が大幅に増え、例年の4倍近くの申込者数となりましたが、会場収容者数の制限がないことから、申込者全員に参加いただくことができました。登壇者の背景画面を統一し、背景の中に登壇者名を表示して、画面上での一体感とわかりやすさを重視しました。また、質疑応答では、Q&A 機能で募集した参加者からの質問をもとに、登壇者と進行者が対談する形式としたことで臨場感が生まれました。

「SD 共同研修プログラム」は、広い知見と高度な専門知識の獲得に加え、大学を越えた情報交換やネットワークづくりの機会とすることを目的としています。今年度はすべてオンライン開催となりましたが、カメラをオンにして参加を促すことや、一部の研修では、ブレイクアウトルーム機能を使用してグループワークを実施することで、講師や参加者間の交流が可能となりました。

イベント名称	開催月	年間開催回数	開催形式
SD フォーラム	10月	1回	オンライン
SD 共同研修プログラム	8月～12月	5回	オンライン
SD ゼミナール	5月～7月	8回1コース	中止

高大連携事業

高大連携事業は、京都府教育委員会、京都市教育委員会、京都府私立中学高等学校連合会、京都商工会議所、大学コンソーシアム京都の連携組織である京都高大連携研究協議会が取組を進めています。

「高大連携教育フォーラム」は、第1部で京都府内の高等学校、京都府外の高等学校及び大学の構成で、3つの事例報告とパネルディスカッション、第2部では6つの分科会を2日間に分け、すべてオンラインで開催しました。

「高大社連携フューチャーセッション」は、京都府内の高校生・大学生を対象に実行委員を募り、この実行委員が主体となって企画・運営を行いました。例年、京都府北部地域と京都市内地域の2会場に分けて開催していましたが、オンライン開催により、物理的な場所や互いの隔たりを気にすることなく、他校の生徒・学生と交流することができました。

「京都高校教員交流会」は、各校での休校措置及びオンライン授業の導入が必要とされる事態に対応すべく、試行的に実施したオンライン・プレ企画を含む計4回を、Zoom を用いたオンライン開催としました。



イベント名称	開催月	年間開催回数	開催形式
高大連携教育フォーラム	12月	1回	オンライン
京都高校教員交流会(オンライン・プレ企画含む)	5月・8月・10月・2月	4回	オンライン
高大社連携フューチャーセッション	11月	1回	オンライン

学生支援事業部

学生支援事業部では、学生や大学が持つ活力やアイデアを活かし、学生間、大学間の交流をより充実させることを目的として、「京都学生祭典事業」、「京都国際学生映画祭事業」、「障がい学生支援事業」に取り組んでいます。2020年度はコロナ禍の中、各事業で例年開催している多くのイベントを、オンラインで開催しました。初の試みとなったオンライン開催で工夫した点等についてご紹介します。

京都学生祭典事業

京都学生祭典は学生の手で京都を盛り上げようと学生実行委員会が主体となって、2003年から毎年10月、平安神宮・岡崎公園一帯（京都市左京区）をステージにおどりや音楽などが繰り広げられる一大イベントです。今年度で18回目を迎えましたが、新型コロナウイルス感染症拡大防止の観点から、祭典史上初となるオンラインでの開催を中心として、企画の一部を岡崎地域からライブ配信するという、ハイブリッド形式による京都学生祭典となりました。オンラインで開催したことにより、通常であれば京都に来て参加することができない全国各地の団体をはじめ、多数の方々にご参加いただいたことから、日本国内にとどまらず、海外からも京都学生祭典本祭を楽しんでいただくことができました。学生のアイデアが生み出した、このような時だからこそできる「新たなお祭り」の一つとして、その形を示せたのではないかと思います。

本祭までは、当日のライブ配信の紹介や出演者を決定する予選などの事前コンテンツを、また本祭終了後はYouTubeライブ配信をした当日のハイライトをアーカイブ動画として10月末までホームページに掲載しました。

本祭では、YouTubeライブにて「京炎そでふれ!」の演舞動画や「Kyoto Student Music Award」の演奏動画など学生の様々なパフォーマンスを楽しむ「視聴型企画」に加え、謎解きやオンライン料理教室、そして平安神宮前にいる踊り手と自宅などから一緒に踊りが体験できる「参加型企画」を実施しました。



京都国際学生映画祭事業

京都国際学生映画祭は、学生実行委員が運営する日本最大級の国際学生映画祭として、国内外問わず、広く学生監督らの映画・映画作品をコンペ形式で募集・選考を行い、京都国際学生映画祭で上映することで、京都から若き才能の発掘と映画文化の発信、映画人材の国際交流を目指しています。

本祭に先立ち、映画祭の告知を兼ねたイベントとして、キャンパスプラザ京都前の屋外エントランスでミニ上映会を行いました。また、今後、京都大学医学部附属病院や立命館大学での映像配信も予定しています。

2021年2月に開催する第23回目となる京都国際学生映画祭は、初のオンライン開催となりました。上映作品のほか、授賞式をはじめ様々なコンテンツを用意し、現在配信準備を進めています。



障がい学生支援事業

障がい学生支援事業では、障がい学生支援を担当する教職員を対象とする意見交換・研修の場の創出や、聴覚障がい学生に対する支援（情報保障のスキル向上等）を目的として、「関西障がい学生支援担当者懇談会」（KSSK）をはじめ「ノートテイク・パソコンテイク養成講座」、「テーマ別研修会」、「高大連携懇談会」に取り組んでいます。

今年度はコロナ禍の影響により、各イベントともオンライン開催で実施しています。講師による講演後のグループワークや小グループに分かれての情報交換会を行う際は、オンライン会議システムアプリのブレイクアウトセッションを活用して行いました。また、インターネットの環境等の事情により、オンラインでの参加が難しいといった声に対しては、キャンパスプラザ京都を会場として、パソコンを用意し、同会場からオンライン参加できるようサポートを行いました。オンライン開催することにより、これまで参加されることのなかった近畿圏外からの参加者も多くあり、オンライン開催のメリットが活かされていると感じています。



国際事業部（国際連携事業）

国際事業部では、学生の海外留学・交流促進や教職員のグローバル化支援に関する事業とオール京都で留学生の誘致・受入環境整備を推進する「留学生スタディ京都ネットワーク」の事務局事業を行っています。

今般のコロナ禍においては、国際的な人の往来そのものが制限され、また、いわゆる“3密”になりやすい交流事業（例えば、留学生と日本人学生、地域との交流事業など）など、国際事業部として想定していた多くの取組に支障が生じることとなりました。

そうした状況の中でも、様々な情報発信や、急速に新たな社会インフラとなった“オンライン”ツールを用いたイベントの開催など、その時できることをその時取りうる手段で実施してきました。

ここでは、その中からいくつかの事業を取り上げてご紹介します。

英語で京都をプレゼンテーション（国際連携事業：学生の海外留学・交流促進事業）

主に海外留学を検討する学生を対象に、京都や日本の伝統文化についての理解を深め、留学中あるいは留学後に京都を訪れている外国人に対して、京都や日本の魅力を英語で伝える力の向上を目指すプログラムです。文化体験としての茶道・華道、“名勝”に指定される日本庭園「無鄰菴」の散策などを含む全6回で構成されています。

例年、秋学期（後期）以降の留学を視野に、春学期（前期）に開催していましたが、コロナ禍のため一旦延期しました。社会情勢を鑑み、すべてオンラインでの実施も検討しましたが、秋学期（後期）での開講に向け文化体験の一部だけでも対面のできるよう工夫し、全6回のうち1回を対面での文化体験（茶道・華道）にすることとしました。そして、唯一対面授業となる文化体験については、茶道は歴史ある京町家（呉服問屋）の和室（茶室）で、そして、華道は“いけばな池坊”発祥の地である六角堂（池坊会館）で実施しました。対面とオンラインのハイブリッドとなりましたが、その分、例年にくらべてより本格的な文化体験ができるよう企画しました。（例年はキャンパスプラザ京都内で実施）



変則的な内容で、対面での学生同士の交流機会を十分に作ることはできなかったことは残念ですが、学生の海外留学や外国人をおもてなししたい気持ちを少しでもサポートできていればと願うばかりです。

首都圏の日本語学校をターゲットとした留学生誘致事業（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）



国際事業部を事務局とする「留学生スタディ京都ネットワーク」では、国内外への効率的・効果的なプロモーションによる「留学先としての京都」の認知度・ブランド力を高めることで、海外・国内からの京都留学（進学）の促進につなげるとともに、加盟校の留学生誘致活動等の支援や、京都で学ぶ留学生に対する、交流支援、就業支援など受入環境を整備することで京都における留学生生活の満足度向上に向けた支援に取り組んでいます。

2019年度からは、首都圏の日本語学校をターゲットとして留学生誘致事業に取り組んでおり、日本語を学ぶ留学生の多くを占めている首都圏において、大学等への進学のタイミングで京都を選んでもいただけるよう京都進学説明会等を実施しています。

留学生の進路決定には春先のタイミングでの情報提供が非常に重要になりますが、今年度はコロナ禍により首都圏に出向いての説明会開催が難しく、オンラインツールの黎明期の段階から、オンライン説明会の準備・開催を余儀なくされました。

手探りの中、準備を進め、京都の各学校からの御協力も得て、6月にオンラインで初めての説明会を開催することができました。日本語学校からは、「多くの説明会が中止され、留学生が進学情報を得ることが難しい時期に、京都をあげて説明会を開催いただき本当に感謝している」との声もいただきました。その後も説明会の開催を重ね、合計で12回開催、参加者数のべ679名と多くの留学生・日本語学校教職員にPRすることができました。オンライン説明会は、対面に比べ留学生の反応が分かりにくい面もありますが、留学生にとっては落ち着いた環境で聞くことができ、一度により多くの留学生に情報を届けることができる可能性を秘めています。オンラインのメリット・デメリットを踏まえながら、今後ともより良いものとなるよう工夫していきます。

留学生対象有給インターンシップ（留学生誘致・支援事業：留学生スタディ京都ネットワーク）

留学生スタディ京都ネットワークでは、就業支援の一環として、留学生に特化した有給でのインターンシップを実施しています。

今年度はコロナ禍の中で、中止となった学生向けインターンシップが多くある中、ただでさえ機会が限られている留学生向けのインターンシップについては、なんとしても実施したいと考えていました。具体的には、社会情勢も見ながら、ガイダンスや企業との交流会、マッチング面接、事前・事後研修などできる限りオンラインを取り入れることで、規模は小さくなったものの、中止することなく継続して実施することができました。

実際のインターンシップ就業については、実施企業の業態に応じて、出社（対面）と在宅勤務（オンライン）を併用しました。留学生にとっては、これから増える可能性があるニューノーマルな環境において、貴重な企業就業体験ができたのではないかと考えていますし、成果報告会では、大きく成長した留学生の姿を見ることができました。コロナ禍で、企業にとっては厳しい環境が続くことも想定されますが、オンラインも活用しながら、引き続き、留学生にインターンシップ就業の場を提供していきたいと考えています。



教育事業部

教育事業部では、インターンシップを大学における学びの一環として位置づけ、産官学地域の連携による教育プログラムとして実施しています。今年度を実施したオンライン・インターンシップの取組についてご紹介します。

教育事業（インターンシップ・プログラム）

2020年度の大学コンソーシアム京都 インターンシップ・プログラムは新型コロナウイルス感染症の影響により全面中止という苦渋の決断を余儀なくされました。そのため、この1年間は2021年度のプログラム実施を目指して「オンライン・インターンシップ」導入の検討を進めてきました。その中で、財団事務局が受入先でのオンラインの活用、導入をサポートできるよう、NPO法人 DeepPeople が実施した「SDGs オンライン・インターンシップ」に受入先団体として参加しました。



オンライン・インターンシップの概要

- ・計9日間、完全オンライン（Zoom、Slack を使用）で、大学生5名（関東在住2名、関西在住1名、九州在住1名、アメリカ在住1名）を受入。
- ・サステナブルな経営に取り組む企業2社に協力いただき、コロナ禍で新しい働き方・価値観が生まれている中、企業の在り方について「今、学生が聞きたいこと」を学生がオンラインで取材。



参加学生からは「オンラインだからこそ様々な人たちとディスカッションでき、新しい働き方を学ぶことができた」等の声をいただき、事務局としてはオンラインツールを使用した働き方を経験してもらえたのではと感じています。

一方、オンラインでは、より正確に伝えるためには適切な言語化が必要であること、ジェスチャーや相槌などのリアクションを大きくすること、軽い相談やこっそり聞くようなことが溜まっていかないよう個々で面談するなど、コミュニケーション方法の工夫やケアが必要であることが分かりました。

2021年度のインターンシップ・プログラムはオンラインと対面でのプログラムを併用して実施します。オンライン・インターンシップを実施して得た経験を今後受入先企業・団体への支援につなげていきます。

調査・広報事業部

調査・広報事業部では、毎年多くの学生で賑わう京都から発信する政策研究交流大会(昨年度来場実績: 507名)を、今年度はオンラインで開催することになりましたので、その様子についてご紹介します。

第16回京都から発信する政策研究交流大会



本大会は、都市が抱える課題を研究する学生が日ごろの研究成果を発表し、社会に対する政策提案を行う場となることを目的に開催しており、例年、口頭発表とパネル発表に分かれて多くの参加者で賑わいます。

コロナ禍であっても学生たちがオンラインでつながり、研究成果を発表できる場をもってもらいたいという思いから、7発表・8分科会をZoomで同時配信しました。開催したのは2020年12月20日(日)。午前10時から発表を開始し、受賞者発表の終了は午後4時半頃となりました。

長時間のオンライン環境により、審査する側、発表する側とも疲れることを考え、当初はかなりの規模縮小も検討しましたが、できる限り本来の形に近い開催を目指し、大会の醍醐味のひとつである、学生実行委員が企画する学生企画や、表彰式における参加者の緊張と喜びも味わってもらえるよう工夫しました。

分科会では、発表者自身がパワーポイントを画面共有しながら発表を進め、同じ分科会の参加学生や、審査員からの質疑応答に答えました。発表者はゼミ単位の場合もあれば個人の場合もあります。300名を超える学生が発表者として参加し、その様子は、YouTube ライブで一般の方にも視聴していただきました(限定配信)。

分科会終了後に実施した学生企画では、オンラインの接続数を分散させるため、「観光・文化」、「まちづくり」、「交通政策」など、学生実行委員が考えた異なる分野ごとに分け、参加学生同士がより交流できるよう工夫した内容で実施しました。分科会終了後のほっとした空気の中、和やかに交流を深め、学びも深める時間になったのではないかと思います。

最後の受賞者発表の時間は、例年のように舞台上に登壇する式とはならなかったものの、結果を待つ学生の緊張感や、受賞者の喜びはオンライン越しにも伝わってきました。



Information

「大学のまち京都・学生のまち京都」公式アプリ KYO-DENT（キョーデント） 京都の学生自らが、京都での充実した学生生活を送るための学生向けアプリを開発！

京都での学生生活で、自分を変えてみたい、新しい何かを見つきたい。自分の知らない世界を知りたい・・・。
KYO-DENTは、そんなあなたのため、京都の学生のためのアプリです。

▼まずはアプリをダウンロードしてみよう！



▼主な機能紹介

- 学生同士で情報交換（みんなの掲示板）
- 手帳、日記、家計簿（マイ京都）
- 学生限定クーポン（お得！）
- ニュース、イベント（京のコト）
- 交通経路、スポット情報（マップ）

▼使えば使うほどポイントが貯まります！

アプリへのログインや、ニュース記事・掲示板の閲覧などで、120種類以上の電子マネーに交換可能な KYO-GAKU ポイントが貯まります。毎日アプリをチェックしよう！



大学コンソーシアム京都

インターンシップ・プログラムポータルサイトを開設！

「大学コンソーシアム京都のインターンシップで、京都の社会と学生、他大学の学生同士がリンクする。リンクすることでワクワクするミライにつながる。」をコンセプトにデザインを一新！

申込を検討している学生のみならず、受入れを考えておられる企業・団体様にとって、より見やすく、分かりやすい情報をお伝えできるよう改善しました。

修了生の体験談、企業・団体様から学生へのメッセージ、企業・団体様向けの情報なども掲載しています！

みなさま、ぜひご活用ください。



<https://consortiumkyoto-internship.jp/>



公益財団法人 大学コンソーシアム京都
The Consortium of Universities in Kyoto

〒600-8216 京都市下京区西洞院通塩小路下る キャンパスプラザ京都内

TEL : 075-353-9100 (代表)

FAX : 075-353-9101

E-mail : pr-ml@consortium.or.jp

WEB サイト : <https://www.consortium.or.jp/>



大学コンソーシアム京都

